

東北公益文科大学

総合研究論集

18

読書案内

徳井淑子『図説ヨーロッパ服飾史』

遠山茂樹

二〇一〇年七月二〇日発行

読書案内

徳井淑子『図説ヨーロッパ服飾史』

河出書房新社、二〇一〇年三月三〇日初版発行

ISBN 978-4-309-76140-4

定価本体一八〇〇円（税別）

遠山 茂樹

もうかれこれ二〇年ほど前になるが、首都圏のある大学で「卒業論文指導」を担当していたときのこと。学生のひとりが卒業論文のテーマにフランス近代の服飾史を選択してきた。なにぶんにもフランス史は専門外であり、ましてや「服飾史」となると正直、指導できるかどうか心もとなかった。それでも、仕事と割り切って、神田神保町の古書店をはじめながら文献を漁ったときのことをつい昨日のことのようにおもいだす。

のっけから私事で恐縮であるが、著者からご惠贈にあずかった本書を手にしながら、わたくしの脳裏に浮かんだのは、そのときのことであった。あのとき本書のような入門書があったならば、どんなに助かったことか。当時は今日に比べれば、服飾史に関する書物も少なかっただけに、なおのことその感を強くする。

本書はフランス服飾史研究の第一人者が一般読者向けに著したヨーロッパ服飾史である。著者はあとがきで「衣服は、それぞれの時代と社会のなかで、そこに生きた人びとの生活感情を映し出す鏡ともいえる」と述べ、「衣服の歴史はゆ

えに時代感情を知るための格好の対象であるが、しかしその解説は必ずしもやさしくはない」として、服飾史の魅力と同時に、そのむつかしさを率直に吐露している。たしかに衣食住というわれわれの日常生活に密接にかかわるテーマは親しみやすいテーマであるが、その歴史を「叙述する」となると、あまりに身近なものであるがゆえに、かえって種々の困難をともしなうことは容易に察しがつく。

本書は次の四つの章から成っている。第一章 身体の誇張、第二章 色彩感情と文様の意匠、第三章 異国趣味とレトロ趣味、第四章 ジェンダー、下着、子ども服。さらに各章は四ないし五つの節から構成されている。著者に倣って言えば、第一・二章では衣服のかたちや装飾、色や模様、あるいは着装のありかたなど、主に衣服の形象の側面から、第三・四章では異文化接触、異国・懐古趣味、ジェンダー、子どもなどをめぐる社会事象の側面から、それぞれ衣服が放つ多様なメッセージが語られている。

以下、興味深い事例を二・三拾いあげながら、全体を通じてみられる特徴を述べ、本書の紹介に代えたい。
なによりも本書を手にした読者は、まず豊富な図版の数々に目を奪われるであろう。本書を読みすすめていくと、掲載されている絵画や写真は、単なる読者サービスではないことがわかる。それは添えられているキャプションからもうかがえる。

たとえば、第四章一、ズボンの表象に掲げられているジャン・ペロー画「ブルーローニユの森のサイクリング」
一九〇一—一〇年のキャプションをみると、「パリの上層階級の女性は、馬車に自転車ママを乗せてブルーローニユの森まで送らせ、サイクリングを楽しんだ（ソー、イル・ド・フランス美術館）」とある。この絵で目を引くのは、描かれている女性たちがはいているブルーマー型マーのズボンである。

フランスの作家ジョン・グラン＝カルトレによれば、女性がズボンをはくようになったのはサイクリングやゴルフな

どのスポーツが流行したことによる。そのための服装として用いられたのがブルーマー型のズボンである。著者によれば、それは一八五一年、アメリカのアメリア・ブルーマー夫人（一八一八〜九四年）が、活動性をもとめて、トルコ風のパンツをまねてつくったズボンに由来する。当初、この型のズボンは夫人が女性拡張論者であったこともあり、その着用には抵抗が大きく、普及することはなかったらしい。ところが、半世紀後にサイクリングが流行すると、スポーツ服としてとり入れられたのである。換言すれば、ズボンはスポーツを介して女性の服装に入ったことになる。ジャン・ペローの作品は、そのあたりの事情をよく伝えていて、ひじょうに新鮮に映った。

とはいえ、女性のズボン着用にはかなり抵抗があったようで、二〇世紀初頭のパリの既製服店「ベル・ジャルディニエール」のカタログには、サイクリング用のズボンが掲載されているが、表はスカートの形状をしていて、まるでズボンを隠すかのようである。一九三〇年代においても、ズボンはリゾート地で余暇を過ごすファッションにすぎなかった。日常生活で女性のズボンが目にもふれるようになるのは一九六〇年代で、それに貢献したのが一九六八年のパリの学生たちによる政治運動、いわゆる五月革命であった。そして一九六〇年代後半にズボンは晴れて女性に解放される。その際一役かったのが、かのイヴ・サンローランであった。イヴ・サンローランはズボンを日常着として、スカートに代わる女性の基本的な服装スタイルに定着させようとした最初のデザイナーだったのである。

ともあれ、随所に挿入されている図版の美しさもさることながら、それに附されているキャプションと本文の内容とがみごとにリンクしていて、各々の時代に生きた人びとの衣服に対するイメージがふくらんでくる。そして、本書を読みすすむうちに、いつの間にか読者は「こういう歴史もあつたのか」という感慨を抱くにちがいない。

色に対する良悪の感情と衣服の関係も興味深い。一例をあげよう。本書の第二章一、黒服とメランコリーには、色彩感情の変化とともに黒服が流行した時代背景が述べられている。著者によれば、黒服は一五世紀から一六世紀にかけて流行するが、その背景には憂鬱な感情の吐露を好む美意識があつた。当時流行した涙滴紋（涙の文様）（涙の文様）も、人びとのメ

ランコリックな心のうちを表現していると著者はいう。

一五世紀が厭世観に満ちた時代であったことはよく知られている。黒死病が蔓延した一四世紀半ば以降出現する画像テーマ△死の舞踏▽は、生と隣りあわせになった死の存在を当時の人びとがいかにリアリティをもつてうけとめていたかを雄弁に物語っている。

そもそも黒は清貧のしるしとして修道士が着る服の色であり、日常の衣服の色として使われることはまれであった。筆者によれば、黒は狂気・怒り・醜悪・裏切りのシンボルでさえあった。ところが、中世末期に黒の価値は高まる。いふならば、負のイメージから正のイメージへという転換が起こるのである。

一六世紀になると、黒に新たな付加価値が加わる。すなわち、人びとは人間の気質としての憂鬱質メランコリに芸術家としての素質を認め、これに結びつく黒を尊重するようになるのである。一五世紀イタリアの医者・哲学者のマルシオ・フィチーノは、黒胆汁メランコリを多くふくむと考えられる憂鬱質に、芸術家の資質や天才のしるしを認めていた。中世的な職人を芸術家の地位におしあげたルネサンスの時代に、黒はプラスの付加価値を付与されるのである。黒が憂鬱に満ちた色であるという点は前世紀と変わりないが、そこに芸術家や知識人の才能を重ねあわせたという意味で、一六世紀は新しい黒のイメージが「発見」された時代だった。

そして、一六世紀の黒にさらなる意味を付与したのがプロテスタントの宗教思想であった。教会からいっさいの装飾を排除し、禁欲的であったプロテスタントの思想は、黒を道徳的な色として、市民階級に根づかせることになった。黒が今日にいたる衣服の歴史のなかでゆるぎない地位を占めるようになったのも、プロテスタントの倫理によるところが大きいと著者はいう。周知のように、ドイツで始まった宗教改革はヨーロッパ各地へとひろがり、それにもなつて黒い服装はヨーロッパ市民に定着した。「レンブラントの描くオランダ市民がみな黒い格好で描かれているのは、いち早い市民社会の成立による」という著者の指摘には、はっとさせられた。とはいえ、一七世紀後半のフランスでは黒服は

贅沢な盛装となっていたようで、「黒が必ずしも宗教的な倫理観を示すというわけではない」。

実際、黒が服装の色として決定的となるのは一九世紀のことで、男性の仕事着としてであった。この点については第二章二、資本主義社会の黒服で説明がなされているが、著者も述べているように、一方で一九世紀は、働く男性と家庭を守る女性という性による役割分担が最もきわだった時代であった。「ここに、男の勤労を示す黒服に対して貞淑な妻たるものの白いドレスという、もう一つの色対比が生まれる」。そして、白いドレスは純潔の証しである白いウエディング・ドレスへと集約されていく色のシンボルを生み出すことになったのである。

ところで、ファッションは繰り返す。その好例ともいえるものが本書の第三章、異国趣味とレトロ趣味にみいだせる。一八世紀後半から一九世紀初頭にかけて、ヨーロッパでは古代ギリシアやローマへの憧憬が高まり、一種の古代礼讃ブームがまきおこる。周知のように、この時代は美術史あるいは建築史の上では、新古典主義ネオクラシシズムとよばれている。当時は絵画のみならず、建築、彫刻、工芸などさまざまな分野で均整・調和・簡素を旨とする古典古代の美意識が再評価されたが、そのきっかけとなったのがナポリ郊外にある古代ローマ遺跡のヘルクラネウムやポンペイの発掘であったことはよく知られている。ドイツの美術史家ヨハン・ヨアヒム・ヴィンケルマンが『ギリシア芸術模倣論』（一七五五年）や『古代美術史』（一七六四年）を著して古代の芸術を讚美し、大きな反響を呼んだのもこの頃である。

こうした古代礼讃ブームはファッシオンの領域にも及び、一九世紀初めのナポレオン帝政時代にはシュミーズ・ドレスが流行する。この型のドレスそのものは、女流画家エリザベート・ヴィージェルブランの描いた「シュミーズ・ドレスのマリー・アントワネット」（一七八三年）にもみられるように、フランス革命前から存在していた。だが、それが時代の様式として確立されるのは一八世紀から一九世紀初頭のことであった。

このシュミーズ・ドレスに代表される帝政様式は、なによりも簡素でゆつたりと身体を包み込んでおり、本書の第一章、身体の誇張の冒頭で説明されている古代ギリシア・ローマ人の衣服を彷彿させる。著者も指摘しているように、

なんといっても、古代ギリシア人の衣服にみられるドレーパリーの美しさは格別である。これに対して、寒冷の地に住むゲルマン民族はズボンを必要とした。かくして、上着チュニツクと脚衣の二部形式がゲルマン服飾の特徴となる。一八世紀後半から一九世紀初頭にかけてのヨーロッパ人にとって、回帰すべきは古代ギリシア・ローマの方であった。

しかしながら、「服装の帝政様式を推進したのは古典古代への憧憬ばかりではなかった」。こう述べて、著者はかかる様式を推進した要因として、イギリスの自由思想の影響による産業化の進展、ブルジョア倫理にもとづく快適性の追求と簡素化、あるいは自然回帰による田園趣味、そして綿布やウール・モスリンといった軽快な素材の普及などをあげている。つまり、シュミーズ・ドレスに代表される古代調のファッションも、さまざまな要因が複合的に作用した結果であり、単なる古典古代への憧憬によるものではないというわけである。まことに、ファッションは歴史的産物であった。本書では触れられていないが、当時のパリでは汚物の処理や下水道の悪臭などに端を発する公衆衛生問題が顕在化していた。ブルジョワジーが快適性を求めた背後には、こうした「都市の闇」とでもいうべきものがあつたことも忘れてはならないであろう。無_誤論、この点についても著者は誰よりも知悉しているにちがいない。

他方で、古代風ファッションがもてはやされた一八世紀後半には、服装のみならず、政治思想、スポーツ、飲食、習慣にいたるまで、イギリス風が流行した。一七七〇〜八〇年代には、こうしたアングロマニー (anglomanie) 「イギリス心酔」という言葉で表現されるイギリス趣味がフランスで流行する。異国趣味といえは聞こえはよいが、要するに、イギリスかぶれにほかならない。マリー・アントワネットがヴェルサイユのプチ・トリアノン宮にイギリス風の自然庭園をつくり、田舎家アモイを建てて、みずから乳搾りを楽しんだのも、このようなアングロマニーのひとつであり、ここにも簡素が好まれる背景があつたと著者は説く。

マリー・アントワネットにとつて、イギリス風の庭園は隠れ家アージュールだつた。台所の生ゴミから寝室の秘め事にいたるまで、王室の家庭事情のいっさいが「公」的な問題であつた当時、庭園もまた公共空間であり政治空間であつた。さしものマ

リー・アントワネットもスキャンダルの渦巻くヴェルサイユの庭には嫌気がさしていたにちがいない。ヴェルサイユの庭は彼女にとつて決して居心地のよい場所ではなかった。プチ・トリアノンこそが、彼女にとつては本来の「私」でいられる空間だったのである。「公」と「私」の問題は、こうしたところにも見えかくれしている。

衣服は文化事象の具体的で可視的な象徴であり、ひとつの記号である。これを「テキスト」として読むことは、その時代の一面を「具体」から知ることになる。本書は衣服の形態の変遷をやみくもに追いかけるのではなく、それが誕生した時代背景や社会事象、さらには各々の時代に生きた人びとの生活感情―色彩感覚や自然感覚、あるいは宗教観や子ども観などにまで立ち入って、ヨーロッパの服飾史の流れをたどっている。本書の最大のメリットはこの点にあるといえよう。巻末にあげられている研究書や学術論文も、さらなる研究の手引として有益である。

初心者が手にとりやすい本書も、著者の長年にわたる研鑽の賜物であり、服飾史に関する豊かな学識に裏うちされている。コンパクトな啓蒙書とはいえ、内容は多岐にわたっており、教科書風の「通史」では決してお目にかかれない史実がふんだんにもり込まれている。それだけに、紹介者のように服飾史にうとい初学者にとっては学ぶべき点が多かった。一読をすすめる所以である。

*著者の徳井淑子氏は現在、お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科教授。専攻はフランス服飾・文化史で、著書に『服飾の歴史』（勁草書房、一九九五年）、『中世衣生活誌』（編訳、勁草書房、二〇〇〇年）、『色で読む中世ヨーロッパ』（講談社、二〇〇六年）、共著に『カラー版世界服飾史』（美術出版社、一九九八年）、『中世ヨーロッパを生きたる』（東京大学出版会、二〇〇四年）、『色彩の紋章』（訳・解説、悠書館、二〇〇九年）などがある。